

らず、種々の模様有、又一種の箱あり、大にして四角なり内にへだて有て、幅の狭き方に汁つぎの箱、辛み色々入、貞享の江戸鹿子に、提重とあるはこれらをいふ、後に忍びけんどんともいへり、もと此筈どもは、うどんをも入たり、うどんは桶にて持運びしが、後には件の箱になりたれども、猶桶をも用ひしにや、俳諧三疋猿、これほどの廣き住居に櫓のかけ、どちへもつかずうどん一桶、温故集來山が句、春雨やもらぬ家にもうどん桶寛政の末迄も、箱に盛て賣しが、箱は今絶たり、後のうどん箱には、蓋なく模様なども繪かず、家の印などは、そのかみの箱、大名けんどんとはいへど、麺末なる漆繪なり、青貝ミザシなど蒔たるも有、江戸名物鑑、大名けんどん新そばや、一本道具の汁辛味、又忍けんどん藪入や二階へ二膳玄のぶ山、

〔一話一言二十〕西川權清左衛門話○申略

傳通院前樂種屋升屋與左衛門談、昔し我らが地面に米津屋長左衛門とて、そばや有けるが、大名。けんどんとて、箱に源氏やうの繪をいだし商ひける、大ひに時行しとなん、今雁がね屋住ゐたる所なり、其頃大名けんどんとて、大ひにもてはやしけると、かしこは白壁町に屬して、升屋の地面也、めづらしき事故、筆ついでに玄るし上候、

〔嬉遊笑覽十上〕衣食住記に、享保の頃温飼蕎麥切菓子屋へ説へ、船切にしてとりよせたり、其後麺町へうたんやなどいふ、けんどんや出來、蕎麥切ゆで、紅から塗の桶に入、汁を德利に入て添來る、其後享保半頃神田邊にて、二八卽座けんどんといふ看板を出す、かゝればそばをも、うどん桶と、此時始なるべし、

又云、夜鷹そば切、其後手打そば切、大平盛寶曆の頃、風鈴蕎麥切品々出るとあれば、風鈴そばと夜鷹蕎麥とは殊なりとみゆ、思ふに今も御菜籠にて夜そば賣が有、初め夜鷹そばといひしは、このやうの荷にてありしなるべし、狂詩諺解に、風鈴そば夜たかそばと似て非なるものなり、太平に